

中国の Outsider Art

—エージェンシーとアブダクションに着目して—

早稲田大学 石岡亜希子

1 目的

本報告の目的は、中国の outsider art の物質性を再考することである。そのために、N市にある原生芸術工作室（以下、スタジオ）の精神障害者の作品と、B市近郊農村に暮らす労働者で、自宅でひとり制作を行っているL氏の作品とを比較する。2010年、国内初の精神障害者や知的障害者らのためのスタジオが、現代アーティストG氏によって設立された。日本に比べ歴史は短いものの、国内外にネットワークを広げ、様々な活動が展開されている。作品は基本的に絵画で、スタジオが用意した画用紙にマーカーやクレヨン、絵の具を使用することが慣習となっている。一方、L氏は新品の画材も用いるが、廃品を好み彫塑も得意とする。なお、この種のアートの呼称は意見の分かれるところだが、便宜的に「outsider art」と英語表記する。

2 方法

報告者が2015年以来、スタジオを中心に行ってきたフィールドワーク記録、インターネットで収集したスタジオやL氏に関する情報をデータとして用いる。分析にあたっては、ピエール・ブルデューやハワード・ベッカーと同様の立場から、アーティストの天賦の才能という見方を退け、ブルーノ・ラトゥールやアルフレッド・ジェルに倣い、モノを他のヒトやモノに働きかけるアクター／エージェントとして扱う。

3 結果と結論

L氏の廃品は譲り受けたり、拾ったり、古物市場や廃品収集所で購入するなどして入手したものである。「インスピレーション」、「こういう材料があって初めて湧く」、「個性（平凡でない）」、「古めかしい」などというL氏の語りには、廃品がモノとしてのエージェンシーを持っていることが示される。さらに、廃品が極めて重要なアクターであることは、販売や展覧会のために作品を持ち出そうとすると、ネットワークが不安定になることによって、確かめられる。それは、他の作家の作品や税関というアクターが新たに加わり、L氏の作品に付着していたカビが、抵抗勢力として顕在化するというものである。他方、スタジオ所属の精神障害者によって描かれるのは、主に人間以外の生物である。そして、これらを鑑賞する者には、次のようにしてアブダクションが発動される。実在／架空の生物の抽象画は、わかりにくいがゆえに、何らかのメタファーであるという美術の思考回路に入り込み、精神障害者だからこそアートの才能を備え得ているということを想起させ、作品を鑑賞したり、作品や作家について会話したりするという行為を呼び込むことで、精神障害者はますます神聖化されていく。中国では、異常行動や劣悪な入院環境といった精神障害者を取り巻く負のイメージが根強く、廃品はこれに結びつく可能性があるが、新品の画用紙は安全性と清潔さを視覚的に訴える。

文献

Gell, Alfred, 1998, *Art and Agency: An Anthropological Theory*, Oxford: Clarendon Press.

Latour, Bruno, 1999, *Pandora's Hope: Essays on the Reality of Science Studies*, Harvard University Press. (=2007, 川崎勝・平川秀幸訳『科学論の实在—パンドラの希望』産業図書.)